

助詞ガとハの使用

川島 道子

1. はじめに

本研究は、日本語学習者の助詞ガとハの使用がどのように発達していくかを、特に単文の他動詞文でハとガによって言及された名詞を主語（動作主）として解釈する仕方を通して調べることを目的としている。

日本語の名詞、名詞、動詞（以後NNVと略す）あるいは英語のNVNの単文の文理解・文処理は第一言語習得の分野で1970年代から研究が行われてきた（例えば、Bever, 1970; Hayashibe; 1975; Sano, 1977; 鈴木, 1977）。さらに、1980年代に入ってからBatesとMacWhinneyによるCompetition Modelにもとづく単文研究が第一言語・第二言語の両方の分野でいろいろな言語について行われ、単文理解についての興味深い知見が今までに得られている（Bates & MacWhinney 1982, 1989）。本研究もそのモデルの延長にあるので、次にその概要について述べたい。

Competition Model というのは、言語形式と機能の結びつきにもとづく言語処理のモデルである。このモデルによれば、文法とは語順とか形態素、語彙の特徴が主語、動作主、主題などの機能を標示するためにどのように使用されるかを示すものである（Heilenman & McDonald, 1993）。しかし、この形式と機能の結びつきはいつも一対一というわけではない。例えば、(1)では語順、動詞の呼応、また生物名詞などすべてがthe boyを主語として指示しているが、(2)ではthe ballが主語であるというのはもっぱら語順によってきまる。

(1) The boy hits the signs.

(2) The ball hits the sign.

文処理については、(1)のようにいくつかの手がかり（機能）が集まって機能する（converge）場合には、文の理解が容易になる。しかし、手がかりがお互いに競合する（compete）関係になると、文処理が簡単にいかない。(3)はその例であり、語順の手がかりを使えばthe ballが主語であるが、生物名詞の手がかりに従えばthe boyが主語となり、語順と生物名詞の手がかりがお互いに文中で競合して主語の選択にとまどう。

(3) The ball hits the boy.

Competition Model によると、ある機能を標示する手がかりの使用は各言語によって異なり、その手がかりの強さは、それぞれの言語で可能な文からランダム・サンプリングによってえられた文において、その手がかりがどの程度の頻度でその機能を標示している(available)か、かつ、いつも必ずその機能を標示している(reliable)かどうかによってきまる。英語の場合、主語を標示するのに語順は強い手がかりであり、一方、日本語では、語順よりも助詞が強い手がかりとなる。

Competition Model のパラダイムで行われる研究では、文理解の手がかりを次のように競合

(competition)や共存(coalition) 関係にセットした文を実験に使い、被験者がどの手がかりを使って文の理解にいたるのかを調査する。この場合、文を理解したかどうかは、各文の二つの名詞のどちらを主語(動作主)として選択したかによって判断される。使われる文型は、まず二つの名詞と一つの実動詞を三通りに組み合わせ(NVN, VNN, NNV)、それをさらに名詞が生物(animate)か無生物(animate)かによって組み合わせを変え、9つのタイプの文を作る(AVA, AVI, IVA, VAA, VAI, VIA, AAV, AIV, IAV)。¹

実験結果によると、各言語によって文理解の手がかりとなる要因が異なり、英語では語順(Bates, McNew, MacWhinney, Devescovi and Smith, 1982)が、イタリア語(Bates et al, 1982)やドイツ語では動詞との呼応(Cooreman & Kilborn, 1991)がそれぞれ重要な手がかりとして機能することが明らかにされている。さらに、中国語では意味が手がかりとして機能すると報告されている(Miao, 1981; Liu, Bates & Li, 1992)。

日本語では伊藤(1982)、伊藤・田原(1986)、Kilborn and Ito(1989)、Sasaki(1991)が単文理解処理の研究を発表しているが、それによると、日本人話者は、名詞に助詞がつかない文、つまり、前述したような組み合わせの文だと意味を手がかりにして文処理を行う。すなわち、生物名詞を語順のいかんにかかわらず、主語(動作主)とすることが見い出されている。例えば、"The box pushed the horse."という文に対し、英語話者は語順に従い、箱が馬を押したと理解するが、一方「箱 馬 押した。」という日本文については日本語話者は「馬」を動作主として選ぶのである。これは、名詞、動詞が「箱 押した 馬」という順序になっても変わらない。

では、助詞のついた文ではどうであろうか。伊藤・田原(1986)は、日本語話者4歳から成人までの八つの年齢群についてNガNハV、NハNガN、NガNV、NNガV、NハNV、NNハVの六つの文について実演(act-out task)で文の理解をはかった。その結果明らかになったことをまとめると、(1)ガはハよりも動作主性が強い(すなわち、ガのついた名詞を動作主として選ぶ)傾向が見られたこと、(2)幼児では、ガとハが第一名詞についた時の正答率が、第二名詞についた時よりはるかに多く、文理解の獲得途上で語順の役割の大切さを示していること、(3)語順に関係なく、助詞を手がかりにして文処理をするのは10歳以降であること、(4)4歳から8歳までの児童と成人は意味に頼る率が多いことなどである。

Competition Modelにもとづく研究は第一言語の文処理ばかりでなく、二重言語話者あるいは言語学習者の目標言語(target language) / 第二言語の文処理・文理解についても行われている(例えば、Miao, 1981; Gass, 1987; Harrington, 1987; McDonald, 1987; Cooreman & Kilborn, 1991; Liu et al, 1992)。言語処理の手がかりが各言語で異なることは既にみたが、言語学習者が第二言語を理解する時に、どんな手がかりを使って文理解にいたるのであるだろうか。母国語の手がかりを転移するのだろうか。それとも、第二言語の手がかりを使うのだろうか。第二言語の文理解の研究結果によると、大体の傾向として学習のはじめの段階では、学習者は母国語の文を理解する際の手がかりを第二言語の文処理にも使用するが、第二言語への接触が長くなるにつれ、学習者の手がかりはその第二言語を母国語とする話者の手がかりの使用パターンに近づいていくことが見い出されている(例えば、Cooreman & Kilborn, 1991; Heilenman & McDonald, 1993)。

日本語の学習者の文処理については、現在までに英語話者で日本語学習者の文処理ストラテジーに関する研究がなされている(伊藤, 1982; Kilborn & Ito, 1989; Sasaki, 1991, 1994)。Kilborn and Itoと

Sasaki(1991)では助詞のないNNV, NVN, VNNの文が実験に使われているが、実験結果次のようなことが明らかになった。英語話者は日本語を理解する時に母国語である英語の文処理ストラテジー、すなわち、語順ストラテジーを手がかりにする。しかし、それを直接日本文にあてはめ、NVNをSVOと解釈したり、VNNをVOSと解釈したりするわけではなく、NNVだけに用い、最初のNを主語（動作主）としてSOVと解釈する。²そして、他の文型には意味を手がかりとする傾向がみられた。Kilborn and Itoは、この日本語のNNVをSOVと解釈するストラテジーをメタ語順ストラテジー ("meta-word-order-" strategy)と呼び、英語のNVN, VNN, NNVを処理する際の語順ストラテジーと区別している。本研究で日本語処理に関連して語順ストラテジーといった場合、このメタ語順ストラテジーをさす。

次に助詞の入った文（伊藤・田原が使ったのと同じ文）を使用し、伊藤（1982）はアメリカ人日本語教師（日本語または日本学専攻で大学の日本語のコースのTAをしている）とアメリカ人学習者（大学の授業で日本語学習をはじめ一年以上の学習歴をもつ）の二つのグループの日本語の文処理ストラテジーを比較した。その結果、助詞の使用については教師グループは日本語話者に近く、ガとハの両方が文中にある場合、ガを主語（動作主）を標示する助詞として選ぶ傾向があるが、学習者のグループはむしろハを選ぶ傾向が強かった。また、後者のグループには語順ストラテジー使用も多くみられた。Sasaki(1994)では、助詞なし文と助詞の入った文の両方が使われたが、使用された助詞はガとヲで、一文中ガがあるいはヲを一つ、第一名詞か第二名詞につけられた（例、NガNV, NNガV）。実験には日本語を学習しはじめてから7週目の初級の学習者と日本滞在経験もある中級の学習者が参加した。結果によると、学習者は両グループとも意味を主語（動作主）選択に多く使ったが、一方、助詞の使用は、やはり学習歴と相関があり、学習歴が長くなればなるほど助詞に頼る率が多くなることが分かった。

2. 研究の目的

以上、日本語学習者の文処理研究の概要を述べたが、どれも英語話者のもので、他言語の話者の行われていない。それで、本研究は、実験1として、文処理ストラテジーの第一言語より目標言語への転移をみるために、学習をはじめたばかりの学生、英語話者と中国語話者に、伊藤・田原（1986）の実験方法を採用して実験を施行した。また、学習による助詞ガとハの理解をはかるために、実験2として、同じ学習者に同じ実験を4ヵ月後に追試した。

実験1では、日本語を学習したばかりの時には学生はまだ日本語への接触が限られているから、日本語の文処理をする際に母国語のストラテジーを使うことが予想される。すなわち、助詞、ガとハの機能がまだはっきり分からない時点では、英語を母国語とする学生は、前述したように、NNVの文を語順ストラテジーを使用し、SOVと解釈することが報告されているから、助詞を無視して語順に頼るだろう。一方、中国語話者は意味を文処理ストラテジーとして使うことが予想される。また、英語話者は意味にも頼ることがSasaki(1994)で報告されているので、意味ストラテジーも使用することが予想される。実験2では、学生は二学期目に特に名詞修飾節の導入で、ガが主語を標示する助詞であることをあらためて習う機会があるため、ガのついた名詞を主語（動作主）として選ぶ率が多くなることが予想される。

3. 方法

【参加者】カナダの大学で、一番はじめの日本語のクラスを9月から週5時間とり始めた学習者、英語話者11名、中国語話者11名、計22名のボランティアをつのった。³ どの学習者もそれまで日本語学習の経験は皆無だった。実験1は、習い始めてから10週目の11月の半ばに施行された。実験2は、翌年の3月の終りから4月の初めにかけて行われた。実験2の参加者としては、実験1に参加した学生22名のうち、次の学期のコースに進んだ学生13名を対象にした。

【実験材料】実験に用いられた文は2つの名詞と1つの動詞からなるNNVで、名詞には助詞ガとハを組み合わせ、NガNハV、NハNガV、NガNV、NNガV、NハNV、NNハVの6通りの文を用いた。単文中にガとハを入れ、ヲを入れなかったのは、伊藤(1982)、伊藤・田原(1986)等の日本文の研究と比較するためであり、また、岩立(1980)の研究によると、ヲが入った文と入らない文とでは結果に差がないことも明らかになっているからである。⁴ この6文型を、さらに2つの名詞について、生物(A)と無生物(I)の組み合わせを違え、3通りの文を作った。例えば、NガNVでは、AガAV(中立型)、AガIV(生物型)、IガAV(無生物型)の3通りで、従って、全文型は18文型となる。この18文型を1セットとし、3セット、計54文を作った。各セット内の文の順序はランダムにした。生物名詞としては、犬、猫、鳥、馬、亀、猿、無生物には、箱、鉛筆、スプーン、ボール、クレヨン、ケシゴムを使い、そのため、おもちゃの動物6つと小物6つを用意した。動詞は次の6つの動詞、さわった、押した、キスした、たたいた、なめた、かんだを使用した。これらのことばは、猫、鳥、猿を除いてすべて伊藤・田原で使われたものと同じである。名詞、動詞をあわせて、18のことばのうち11月の段階では参加者はまだ3つぐらいしか習っていなかったのもので、名前を書いた紙を動物や小物にはった。また、動詞は、それぞれの英語の意味を書いた紙を見える所にはって、実験の前に学習させ、また、実験中にもすぐ見られるようにした。

【手続き】机の上に動物や小物をおき、実験者が各文を言ったあと、参加者がそれを使って実演するという手順(act-out task)をふんだ。実験の前には練習文4文(実験文と同じような文型)を使い、手順を練習した。

4. 結果

以下の分析で正答としては、NガNハV、NハNガV、NガNV、NNガVの4文についてはガのついた名詞を主語(動作主)としたもの、残りのNハNV、NNハVの2文は、ハのついた名詞を主語(動作主)としたものをそれぞれ正答とみなした。伊藤・田原(1986)に従い、第一名詞(以後、N1)、第二名詞(以後、N2)ともに生物名詞の文を中立型、N1が生物名詞N2が無生物名詞の文を生物型、N1が無生物名詞N2が生物名詞の文を無生物型とよぶ。

実験1 正答率は英語話者が58.2%、中国語話者56.2%であった。実験参加者の文処理を分析するために、言語(2水準)×助詞(6水準)×意味(3水準)の分散分析を行った。その結果、助詞と意味の交互作用($F(10, 200)=13.88$ $p<.01$)が有意であった。これは図1で分かるように、中立型と生物型の間では正答率の分布にあまり差がなかったのに対し、無生物型がまったく違うパターンを示していたからである。次に中立型、生物型、無生物型の各パターンについて英語話者と中国語話者別に正答率の分布をグラフに示した(図2,3,4)。

図1 「意味と助詞」の交互作用

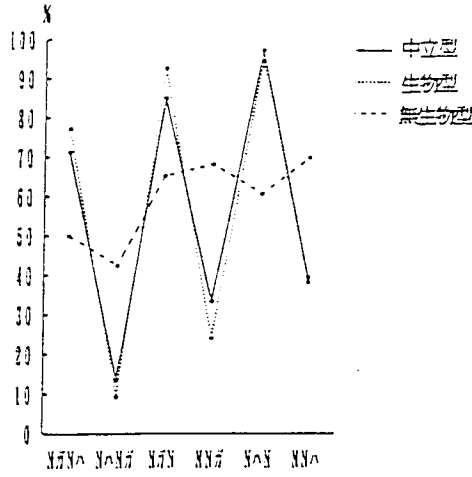


図2 中立型における正答率

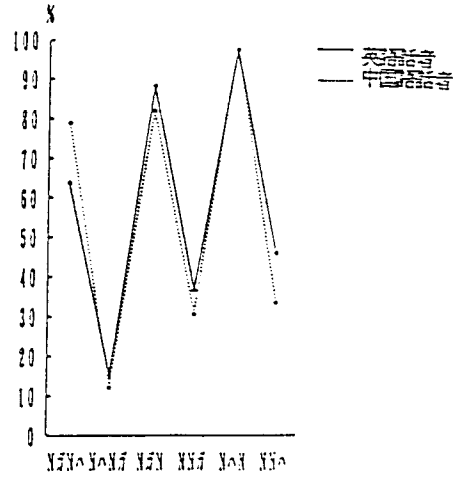


図3 生物型における正答率

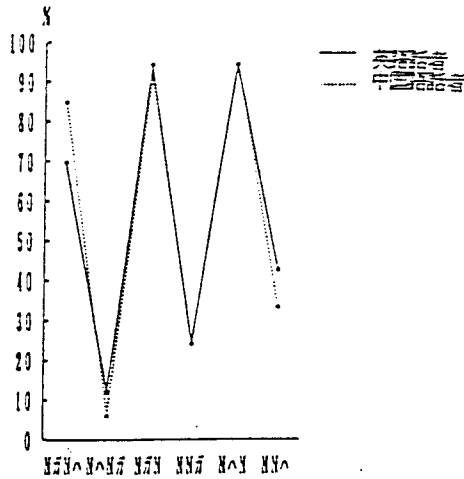


図4 無生物型における正答率

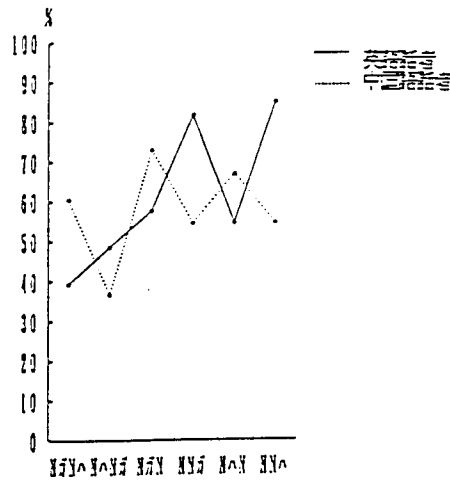


図2と3から分かるように中立型と生物型では、N1が主語となる文がN2が主語となる文にくらべ正答率が有意に高く、これらの文において語順の手がかりが文処理に果たす役割の大きさを示している。英語話者と中国語話者の間にはあまり差はないが、中国語話者にその傾向はやや多い。文処理での語順使用は中国語話者の場合、さらに無生物型にもみられた(図4)。一方、英語話者の正答率は無生物型では全く違った分布を示し、N2にガまたはハのついた文の正答率がN1についてものよりはるかに多い。無生物型は前にも示したようにIAパターンすなわちN2の方に生物名詞がくる。そのため、英語話者は語順よりも生物名詞を手がかりに主語(動作主)を選択したのではないかと思われる。

実験2 正答率は、第一回目の実験が58.3%、第二回目は55.3%であった。分散分析の結果によ

ると、助詞と意味の交互作用が有意であった ($F(10,120)=7.64$ $p<.01$)。第5図はその交互作用を示している。

図5 「意味と助詞」の交互作用

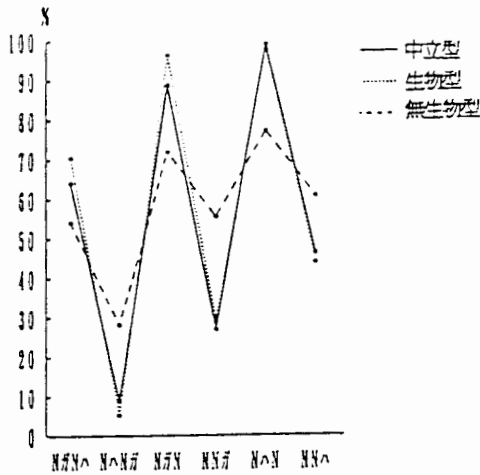


図6 中立型における正答率

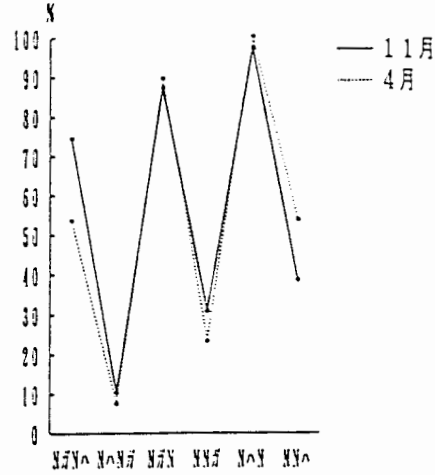


図7 生物型における正答率

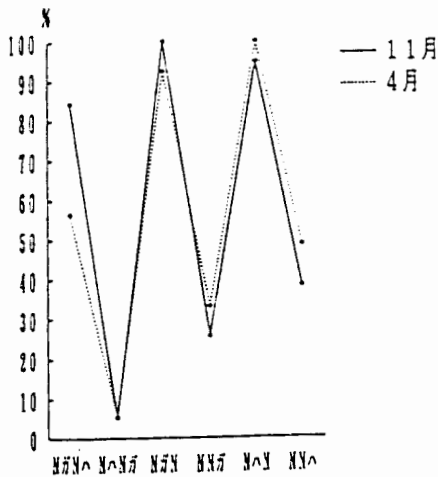
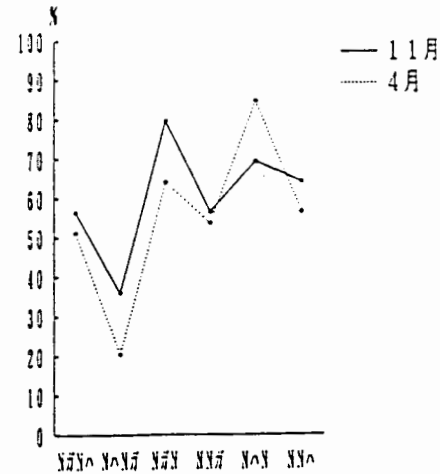


図8 無生物型における正答率



実験1と同じく無生物型の正答率のパターンが他の二つ、中立型と生物型と異なっていた。それで、それぞれのパターンを実験の時期別にみると、中立型(図6)と生物型(図7)では、ハのついた文の正答率が実験2でも少し高くなっている。NガNハV文では正答率が逆に低くなっているが、これは第一回目の実験では語順を手がかりにしてガのついたN1を選んだのが、二回目の時にはハのついた名詞を主語(動作主)として選んだため正答率が低くなったのではないかと思われる。無生物型ではNハNVを除き、全体に実験2の方が正答率が低い(図8)。

結果を要約すると、実験1では英語話者と中国語話者の間には有意差はみられなかった。全体に語順ストラテジーの使用が多いが、英語話者には意味を文処理の手がかりとして使っている傾向もみられた。中国語話者は予想に反し、主として語順ストラテジーに頼っていた。実験2では第一回

目と二回目の実験の間に正答率に差はなかった。むしろ、二回目の方が正答率が少し下がった。従って、ガの習得はみられなかった。それに反し、ハのついた名詞を主語（動作主）として選ぶ率は増加している。語順ストラテジーは相変わらず多くみられた。

5. 考察

実験1では英語話者は予想通り語順ストラテジーを使用し、N1を主語（動作主）として選ぶ傾向がみられた。また、生物名詞を無生物名詞より多く主語（動作主）に選ぶ傾向もみられた。しかし、中国語話者の方は予想とは異なり、語順ストラテジーの使用が多かった。中国語話者は中国語の単文の他動詞文では意味に頼るといっているので、助詞の学習がまだ不十分な学習初期の段階では母国語の文処理ストラテジーを第二言語に転移して意味ストラテジーを使うだろうと予想されたが、実験結果は予想を支持するものではなかった。

では、どうして中国語話者は語順ストラテジーを多く使ったのであろうか。理由としてあげられるのは、本研究に用いられた文が日本語の基準語順だけだったためではないかと思われる。実験文に使われた語順が基準語順以外の語順だと、意味ストラテジーが使用されるが、基準語順だと、語順ストラテジーが多く使われるという例は今までに報告されている。例えば、日本語話者は意味ストラテジーをとるために、日本語話者の英語の学習者が英語の実験文、NVN, VNN, NNV文を処理する時、やはり意味に頼る率が多いのだが、英語の基準語順NVNでは語順ストラテジーをとり、N1を主語として選択する率が増加する（Harrington, 1987; Kilborn & Ito, 1989; Sasaki, 1991）。これは、日本語の他動詞文とは異なり、主語に無生物名詞の選択が多くなるということであり、意味ストラテジーと相反するものである。

本研究に参加した中国語話者の場合は、英語を第二外国語として学習して、さらに日本語を第三外国語として学習している。そして、これらの学習者達も日本語話者と同じく英語の基準語順の他動詞文NVNを処理する際、語順ストラテジーを使用するのではないだろうか。そして、英語の場合、語順は手がかりとして有用かつ信頼性のあるものであるから、それを第三外国語としての日本語の文処理にも過剰般化しているのではないかと思われる。つまり、中国語話者は英語をすでに学び、第三言語としての日本語学習に、学習の方法として語順ストラテジーを使っているのではないだろうか。⁵

実験2では、ハの使用がかなり多くなっているのがみられた。実験第一回目と二回目での文処理ストラテジーの差異をみるため、無生物型（A Iパターン）の文18文につき使用ストラテジーを分類した。この文型を特に選んだのは、N2が生物名詞のため、語順ストラテジーによるとN1を主語（動作主）として選択、意味ストラテジーだとN2選択と、ストラテジーの使用の差が明確にあらわれるためである（伊藤・田原、1986）。この分類によると、第一回目の実験では、18文中正答が14以上のもの2名、語順ストラテジーを14以上とったもの4名、意味ストラテジーを14以上とったもの2名、ハストラテジー（ハのついた名詞を主語とした）を12文中9以上とったものが3名、計11名残りの2名はランダム反応であった。それに対し、第二回目では、18文中正答が14以上のもの1名、同じく語順ストラテジーが5名、意味ストラテジーが1名、ハストラテジー7名（このうち1名は語順ストラテジーと重なっている）で、ランダム反応は一人もいなかった。これでも分かるようにハストラテジーは二回目の実験では2倍にもなっている。また、語順ストラテジーの使用は

引き続きみられた。

上記でみるように、ハの使用はふえたのに、ガは主語（動作主）の選択にあまり使用されていない。ガは主格をあらわす格助詞だが、ハは主題を提示する提題助詞で、文法的な機能が異なり、格関係をあらわさないのだが、本研究の実験に参加した学習者についてはハの動作主をあらわす力はガよりずっと強かった。これは、伊藤・田原(1986)も指摘しているように、実際の言語運用上では動作主にあたる名詞句は、主題化されることが多いから、どうしても経験上ハは動作主／主語であると考えさせる力を持っているのだろう。

では、どうしてガは、動作主としての力が初級の学習者にとって弱く、主格を標示するガの学習が遅れるのだろうか。これは、多分、言語習得上のインプット資料におけるガの主語（動作主）を標示する手がかりの強さに関係があると思われる。手がかりの強さは、前にも述べたように言語データにおけるその手がかりのavailabilityとreliabilityによるものと考えられているが、学習者のインプット資料をみた時、他動詞文におけるガは、手がかりとしてのavailabilityとreliabilityに欠ける。すなわち、NNV型の単文では主語は主題化されることが多く、9月からすぐ使う教科書のまずはじめに出てくる他動詞文では、動作主はハで標示されている。それに対し、ガが出てくるところは存在文、それから、「.....があります。」の所有をあらわす文、「.....が好きです。」と対象格を標示するガがつぎつぎとが導入される。このように所有の構文や「好きです／嫌いです」のパターンの学習が、ガの学習に影響をあたえていると思われる。一方、2学期目には、名詞修飾の構文が出てきて、そこで、ガの主格を標示する機能が明示的に教えられるのだが、本研究の結果にはその学習が反映されなかった。名詞修飾節中のガは、手がかりとしてのreliabilityは高いが、availabilityに欠けているのか、坂本、町田、中窪(1995)によると、名詞修飾の構文を含む従属節中のガの習得はかなり遅いと報告されている。2学期目の名詞修飾節中のガの明示的教授は全く学習に効果がなかったのか、あるいは、その機能が学習されてもその構文にのみにとどまり、他動詞文でのガの機能にまで至らなかったのではないかということが考えられる。たしかに、現在2年目、3年目の学習者にも同様の実験を実施しているが、名詞修飾の構文では正しく答えられる学習者にも、本研究で行ったような実験場面での助詞の使用はなかなかむずかしい。伊藤(1982)の研究では英語話者の日本語教師のグループはガの使用については日本語話者にかなり近くなっていると報告されている。そのようなレベルのガの習得にはどのようなインプットが必要であろうか。また、これはインプットだけの問題かどうか。Heilenman and McDonald (1993)は、言語処理とインプットの問題は実験的に実証されるべき問題だとしているが、他の要因と関連して、さらに実験的に研究が進められていく必要がある。

(アルバータ大学)

注

1.この場合、手がかりは語順と意味である。そして、例えば英語のMVN型において、生物と無生物を組み合わせた三つの文、AVA、AVI、IVAを考えた時、AVAは生物、無生物については中立であるが、AVIとIVAでは、前者は第一名詞が生物名詞で、意味と語順の手がかりが共存関係にある。一方、後者では、第二名詞が生物名詞であるため、語順と意味が競合関係となる。

2.英語のNVN、VNN、NNV文型の文処理研究によると、英語話者はNVNをSVO、VNNをVOS、NNVをOSVと解釈することが今までに報告されている。

3. 中国語話者は、*Japanese Language for Readers of Chinese* というコースをとっていた。このコースは、テキストに最初から漢字を導入される以外、コース内容、教授法などすべて英語話者のコースを同じであった。
4. 助詞なし文の文処理も実験に入れたが、本研究の目的は助詞の習得を見ることであるため、分析に含めなかった。
5. Liu, Bates and Li (1992)によると、20歳を過ぎてから英語圏で生活し始めた中国語話者が、英語のNVN、VNN、NNV型の文処理をする際には基本語順型にも意味ストラテジーを使用するのに対し、16歳未満で来米した中国語話者は全ての文型に語順ストラテジーを使うことが見出されている。さらに、後者のグループのうち、アメリカ生まれの中国語話者（英語への接触が0-4歳に始まった）と12-16歳の時にアメリカにきた中国語話者は、語順ストラテジーを逆に中国語へ転移する傾向が見られた。

参考文献

- Bates, Elizabeth & MacWhinney, Brian. 1982. "Functional approaches to grammar," In E. Wanner & L. Gleitman (eds.), *Language Acquisition: State of the Art*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bates, Elizabeth, & MacWhinney, Brian. 1989. Functionalism and the competition model. In B. MacWhinney & E. Bates (Eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bates, Elizabeth, McNew, Sandra, MacWhinney, Brian, Devescovi, Antonella, & Smith, Stan. 1982. Functional constraints on sentence processing: A cross-linguistic study. *Cognition*, 11, 245-299.
- Bever, T.G. 1970. The cognitive basis for linguistic study. In J.R. Hays (Ed.), *Cognition and the development of language*. New York: Wiley.
- Cooreman, Ann & Kilborn, Kerry. 1991. Functional linguistics: discourse structure and language processing in second language acquisition. In T. Huebner & C.A. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gass, Susan. 1982. The resolution of conflicts among competing systems: A bidirectional perspective. *Applied Psycholinguistics*, 8, 329-350.
- Harrington, Michael. 1987. Processing transfer: Language-specific processing strategies as a source of interlanguage variation. *Applied Psycholinguistics*, 8, 351-377.
- Hayashibe, Hideo. 1975. Word order and particles: A developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 8, 1-18.
- Heilenman, Kathy & McDonald, Janet. 1993. Processing strategies in L2 learners of French: The role of transfer. *Language Learning*, 43:4, 507-557.
- 伊藤武彦 1982 「日本語の「は」と「が」の動作主性：日本人二言語併用者、アメリカ人日本語教師／学習者の比較」日本語教育心理学会第24回総会発表論文集, 24-25.
- 伊藤武彦 & 田原俊司 1986 「ハとガの動作主性の発達」パン・F. C. & 八代 京子・秋山高二（編）『ことばの多様性』 広島：文化評論出版.
- 岩立志津夫 1980 「日本語児における語順、格ストラテジーについて」『心理学研究』 51, 5, 233-240.
- Kilborn, Kerry & Ito, Takehiko. 1989. Sentence processing strategies in adult bilinguals. In MacWhinney, B. & E. Bates (Eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Liu, Hua, Bates, Elizabeth, & Li, Ping. 1992. Sentence interpretation in bilingual speakers of English and Chinese. *Applied Psycholinguistics*, 13, 451-484.
- McDonald, Janet. 1987. Sentence interpretation in bilingual speakers of English and Dutch. *Applied Psycholinguistics*, 23, 109-122.
- Miao, Xiao-Chun. 1977. Word order and semantic strategies in Chinese sentence comprehension, *International Journal of*

Psycholinguistics, 23, 109-122.

- 坂本正、町田延代、中窪高子 1995 「超上級日本語話者の発話における誤りについて」 Proceedings of the 6th conference on second language research in Japan, International University of Japan. 6, 66-94.
- Sano, Keiko. 1977. An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft sentences. *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 10, 213-233.
- Sasaki, Yoshinori. 1991. English and Japanese interlanguage comprehension strategies: An analysis based on the competition model. *Applied Psycholinguistics*, 12, 47-73.
- Sasaki, Yoshinori. 1994. Paths of processing strategy transfers in learning Japanese and English as foreign languages: A competition model approach. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 43-72.
- 鈴木情一 1977. 「日本語の幼児における語順方略」 『教育心理学研究』 24, 3, 56-61.